

非暴力直接行動

トレーニング

沼津の山鹿文庫で、向井氏の提唱になる非暴力直接行動トレーニングが行なわれた。当日、トレーナーをつとめた高橋さんに一文を寄せてもらい、あわせて非暴力直接行動の概要を掲載する。

× × × × ×

小さな総括

高橋 三喜子

一九六七年、夏、キリスト友会の主催による非暴力直接行動のセミナーを受けて、早や一年がたちました。その間、その年の九月、広島キリスト友会主催のセミナー、今年七月沼津のトレーニングにトレーナーとして参加しました。……が一度も総括らしきものも書かず、そのまゝ時の流れと共に気憶は遠くに消え去り、

経験したという言葉が片隅に残っているという状態です。こういう中で、「セミナーでの感想を書いてほしい」と云われてとまどっているのですが、良い機会なので感じたことなど書いてみたいと思います。

☒ 八月の残暑が厳しい昼下り銀座歩行者天国に集まる人々は、何かおもしろいことないかと「じっ」と待っている。その中で私達グループは、「スカットさわやかコカ・コーラ」の唄声と共にゲリラ劇場をはじめました。その間、十五分余り私達はコカ・コーラの有毒性、コカ・コーラを買うことがウエトナム戦争に加担していることを彼らに訴えました。五〇人近くの人々が私達を囲み中には座りこむ人も現われ熱心に見てくれました。ある老人は「よくぞ、いってくれた。わしも常々思っておった」の声もかかりました。そうしているうちに私服の刑事が二、三人うろろうカメラかまえて私達を写しています。五分もしないうちにパリックとした刑事が「君達すぐやめたまえ！ ことは歩くところで立ちどまるところではない。歩行者の迷惑になるからすぐにやめたまえ！」「責任者は誰ダネー」

○ 私はコカコーラを飲んで、ごろごろ転げまわり悶え死んでいく。ギャーという叫び、全身をケイレンさせていく演技に私は死んじゃうじゃないかしら」という気がした。と同時に解放感と快感を味わっていた。これはどこからくるのだらうか……。そういえば日頃、大きな声も出さず、身体の筋肉を思いきって伸ばすことのない生活。大きな声を出すことで、身体を伸ばすことで、こんな解放感を味わえるなら……（いっちょよまたやったるか）

☆ ゲリラ劇場はセミナーでの集約的な要素が多く入っています。ミラーゲーム、ハッスルライン、エレphantゲーム、ロールプレイ、戦略ゲーム等々、それらはみな私にとって、自分の何かまだ見えていない部分を引き出してくれるゲームであり、ひとりよがりになり落ちいりやすい思考方法を拡大させ他者はどう思うだろうか。どう感じただろうか、を問いなおすゲームでもありました。

それはゲームの終わるたびにおこなわれる評価が大切な役割を果していたのです。特に大切に思うことは、理屈でなく感覚を重視していた点です。その時「どう感じたか」へ感じたことを述べるというのは仲々、難かしいようで私達はすぐ理論、理屈で物を押し量ろうとしていたことを思い出します。

セミナーで大切だった点はこの点だったといいたいくらいです。☆ 会合や討論会などでは、ある特定の人の話で終始してしまったり、なかなか意見が出ず時間がなくなったりというようなことはままあります。それらの傾向を打破する方法として、これは良い方法だと思っただけは、ブレインストーミングです。これは用紙に目的とする事柄を片ぱしから書いていくやり方です。この方法ですと、参加者全員がなんらかの意見を述べる機会があることです。私達は、意識的にその機会をつくりだしていくことが必要なのではないか……と思いました。

X X X
最近では字を書くこともなかったもので、たったこれだけを書くのに、ふうふう書いています。でも、ひとくぎりできました。

非暴力直接行動の訓練

非暴力主義と現代の危機

最近、実践活動に従事している人々が、「非暴力主義を試みたら成功しなかった」というのを聞くことが多くなった。この様に言われる理由はたくさんある。非暴力主義の主唱者は、現実的問題の処理よりも、非暴力という主義の方により関心を示すことが多かった。あるいは、人々は非暴力主義を洗練された知性や政治的計画と結びつけて理論を消化させるために、無理に身近な問題を探したりした。この様な非暴力主義の紹介は、非暴力主義を将来の展望、分析、範囲の広い有効な手段として理解してもらうのを困難にしまった。

他の間違いは、行動の指導者たちが非暴力主義という倫理のマントに身をかけたかと思っただけに起きた。そして、ガンジーやキング牧師等の名声に名を借りて、自分の尊厳を得ようとしたことによる。しかし、このことは運動家たちが日和見主義に動かされたというのではなく、多くの人々にとって、変革のための対策と展望をもつ非暴力主義と、それに対して単に暴力を用いない、というだけのものとの現実的な区別が容易にできなかったからなのである。簡単にこの非暴力をうけ入れることは、かえって、非

暴力が失敗した時、急速に反対者を生みだすことにもなった。実際、このようなことがしばしばあったのである。

しかし、非暴力主義の信頼されていない面も次第に少くなっているのかも知れない。なぜなら、官僚支配体制の進歩した技術は、貧弱な計画に基づいた、あるいは思いつきの暴動を、ジェスチャーだけのものは別として無駄なものにしてしまったからである。権力者は金のかかった暴力的反対運動を弾圧のために使う高価な武器を増産する機会として歓迎するのである。彼らは策略や暴動を、現存する支配体制の組織をより強化するための口実として使う。暴力的弾圧を正当化するこの様な暴力の循環は、活動家たちに社会変革の手段として、戦闘的非暴力主義を再考させることになった。

この様な背景の中で、非暴力主義は単に暴力の悪循環を避ける可能性のある社会運動の代替形態である：：という弁解を必要としない。次の様な定義——総括的ではないが——によれば多分、非暴力直接行動の可能性に対して注意を喚起できるだろう。

即ち、非暴力直接行動は暴力に支えられた敵対者と、同種の手段で闘うことを拒否する行動の形態であり、それは反対派や敵対者をも含めた形で社会的解決を探索し、単に相手に打ち勝つことだけが目的ではない。この行動に不可欠なことは相手の暴力に打撃を与えるよりはむしろ自らが喜んで苦しむことであり、休むことなく闘争し続けることである。そして相手の論理にたつて敵対者に直面することでもある。自分たちとつた方針と行動の結果引き起こる一連の事態に対して、それらに修正がいらなくなるまで想像力たくましく力強く対決していかなければならない。

非暴力直接行動のための訓練

インドの独立、アメリカ南部の法的差別の終結、多くの地域目標の達成などの非暴力行動の成功例はその主唱者たちの失敗についてはよく教えたが、それ以上のものを後の擁護者に教えはしなかった。ガンジーの弟子たちは英国に対して非暴力主義で通したが、各部落間のヒンズー教徒と回教徒の紛争と、一九六二年の中国侵入とによって分裂してしまつたし、アメリカにおける差別撤回推進にうまく適用された各種の方法は更に複雑で、秘かにしかし広範囲に行われる住宅差別問題に適用した時には失敗した。多くの地域の行動が次のような場合、即ち大衆の長期的離反と敵意、内部分裂と不一致および複雑な判断を下すこと、および重圧のもとで兵站上の問題を解決するといったことに対処する準備が自分たちには全くないと気がついた時、長期間の幻滅を伴つて挫折した。

組織的訓練は、多くのこの種の問題解決にとって有効である。長期間の闘争では、倫理的情熱や確実な政治的分析だけでは運動を持続させるのに不十分である。人間の価値や相互信頼および個人的貢献に頼る度合の大きいこの種の運動では權威主義もまた有効ではない。

もし何組もの団体が社会悪をなくすのに真剣であればある程、自分たちの行動に先立って、また行動の最中にも訓練を喜んで受け入れるべきである。デモを計画しておきながらデモの世話役の準備をしておかないのは少くとも無責任である。一体誰が全体の計画を説明したり、突発事故を処理するのか。また野次、妨

害者、煽動集団や苛立っている警官との対処方法を誰が決めるのか。この種の問題は住宅問題を管轄する官庁や兵器産業の工場や、頑固な大学当局の前でのおとなしい沈黙のデモ（ウェイジル）のような小規模な行動においても起こるのであるから、まして大規模な長引く闘争の場合は訓練が必要となる。

多くの人々にとって、訓練」という言葉は、軍隊の儀式的地上パレードや退屈な柔軟体操を思い起こさせる。また一方、雇主の要求に合うまで訓練生の心を巧みに操ることを一つの芸として企業などに雇われたりする、人間関係の専門家を頭に描かせたりする。

ここでは、訓練とは自主的な行動に参加する者が準備することであり、また、もし必要なら、彼らとのかかわり合いや共通の理解を分かち合う人々によって援助も得るものである。訓練は実際状況に即して用意される時最も効果的である。訓練の価値は、参加者自身が変革を唱える時さらに大きくなり、結果的により適切なものとなる。訓練によって実践行動家はその人々なりに創造的な活動をするため、人間を大きくしかつ自由にもさせるものである。訓練なしには、集団や運動は幸運に頼るのみであり、そのような集団は七〇年代においては幸運以上のものを求めねばならない。

訓練の歴史的展開

インドの独立運動やガンジの後継者たちとは別に小規模な非暴力直接行動の組織的訓練が始まった。訓練が行われたのは、反戦活動にみられるように大急ぎで行われる一夜漬け的なものが多かった。アメリカの黒人平等運動は闘争が長引き、運動に大勢の

新参加者を動員したため、状況の見通しを得る感覚を身につけさせるのに苦労したものである。ところが、反戦団体は非常に小規模であったし、大低訓練を受けた専門的活動家たちで組織されていたので訓練などは余計なものと感じていた。

北爆反対期間の大衆行進や、後にみられたベトナム反戦行動の大動員を通してはじめて訓練の必要性が顕著になった。ここでもまた、より経験を積んだ活動家の方が大衆の統制や他の面で貢献することが多かった。その他の貢献をした人々は民間伝承によりいつの間にか訓練された人々であった。

戦争抵抗者インター（W R I）は、一九六五年に非暴力訓練の会議を呼びかけた。このときのイタリアのベルシア会議では、真剣な組織的訓練の必要性を確認すると共に訓練者相互の交流を継続するための機構の第一歩を築いた。

訓練の方法

非暴力直接行動の訓練は、その方法が体得され、かつそれが現実の状況で有効であると立証されなければ、それは単なる一つのアイデアで終わってしまう。この章では、訓練のいろいろな方法を取りあげる。あるものは既に有効であることが試験済みであるが、他のものはまだ有効か否か疑問が残っている。なかにはただ理論上有効だと思われるものも盛り込んである。この訓練のための手段は、訓練についての着想や訓練の目的などと切り離して評価してはならないことを記憶すべきである。

1 ロール・プレイ

ロール・プレイは、参加者が紛争状態にあるいろいろな役割を

受けもち、その演出を通じて、その状況を知的にも、情緒面からも検討していくというある種の模擬演習である。ロール・プレイは、戦術感覚や個人の能力、グループの結束力などを発達させるために用いられる。他の方法に比してロール・プレイが勝る点は、その性質上、体験する過程で知性はもとより情緒的な面を包含するところにある。

参加者はロール・プレイに現実と人為的なものとの差異を感じ、疑問を提出するであろうが、それには、適切な解答がなされるべきである。ロール・プレイは現実状況と異なるし、同じである必要はない。それは訓練の手段にほかならない。ロール・プレイは、中心問題が検討され、人々が問題に気付き、現実状況のなかでそれらに対処する方法を学べるように、余計な部分を削除し、現実の決定的な局面だけで場を設定して行なわれる実験である。

事実、よく自分の弁護のためにロール・プレイは現実性がないのではないかと、疑問を投じる人がいる。その疑問をだすことが、ロール・プレイの経験が心の慰めとするには余りに現実味を帯びすぎており、そうであることを示すものである。また、ロール・プレイは少ししか緊張を感じさせないので、ゲームの一つとしてみる傾向もある。この緊張の少ないことがまたロール・プレイの有益なところでもあるのだが、参加者次第で、もっと盛りあげて演ずることも可能であろう。

地主とか、実態の見えない権力が悪であるというような紋切型の設定を避け、内容と筋をこく注意深く定義づけるよう心掛けることが大切である。例えば、指示を与えるときにも、単に「デモをする」とはせずに、「化学・微生物学的兵器について一般大衆

を啓蒙するためのデモをする」というように表現しなさい。筋書きの設定次第で戦略以上により多くの問題をうみ、行動を促す刺激を与えることになるものである。

2 状況分析

状況分析は、基本的には黒板を使った討論の洗練された型であり、対立状況の中でどんな戦術がとり得るかを考えさせる方法である。

状況分析は戦術を理解する力を発達させ、与えられた状況の中でいろいろな戦術を検討し、特定の戦術の結果を調べ、直接行動を行なう状況でのいろいろな集団の役割を調べるのに用いられる。ロール・プレイに勝る点といえば、より大きい状況を検討できることである。従って、大きな視野で状況分析をまずしておいて、その分析された状況を用いて、より狭めた紛争地域に集点を合わせてロール・プレイをやっていくのがよいだろう。

状況分析の主な限界は、この練習が余り容易に理論的レベルに留まり、現実問題から遠ざかってしまうことである。これを防ぐためには素早くロール・プレイに移っていくのがよい。

3 機敏判断訓練

これは差し迫った状況に直面したとき、その場の大切な要因に素早く対応できるようにする方法である。すなわち、緊迫した状況に直面しうる準備をさせ、また緊張状態で素早く思考し、主要な問題に焦点を合わせ、小さな問題にとらわれずに行動決定をなしうるように心の状態をつくる準備をすることである。

主な欠点は、余り沢山の判断訓練をすると、とくに行動をする直前にそれをやると、緊張事態について心が固定化され、それが

緊張を作り出し、人を狼狽させることにもなりうる。この種のさし迫った危険が予測される場合、それを避けるために、他の訓練と調和させるべきである。

4 戦略ゲーム

参加者が政治的、社会的紛争の状態にある対立関係の役をそれぞれが分れて受け持ち、それによって戦略理論を学び、また戦略の結果がどうなるかを学ぶ。これは評価の時間までを含むと四時間から八時間にもわたって行なわれる。参加者はロール・プレイのように役を演じるのではなく、第三者を通じて別の部屋にいる相手方の者と動きを連絡し合う。

戦略ゲームにははっきりとした限界がある。一回のゲームに時間がかかりすぎる。また参加者は実際の条件を十分知らないことが多いし、ゲームを活用して戦略を組むなどということには慣れていない人も多い。しかし、本来このゲームは戦略的な感覚を発達させるために組まれたものである。短期の訓練計画での使用には限度があるが、実験的にやってみて研究する価値はあろう。

5 街頭演説

もともと公衆向けの行動であるが、最近では訓練の手段としてよく用いられるようになってきた。街頭演説は、個人の自信と能力を育て、グループの結束を培い、それほど難しくないが極めて現実的な葛藤状況を提供し、参加するものにグループのいろいろな性格を感じとらせるものである。おそらく最も価値あることといえ、被訓練者が新しい見地から自分を見られるようになることであらう。もはや自分が力の被害者としてではなく、少なくとも、行動を起こすことが出来ると見られるようになる。この新しい認識

は、長く持続する影響力をもつ場合が多い。

その他

ゲリラ劇場——一種の大衆向け行動であるが、訓練の手段としても用いられる。個人の自信とグループの結束を培うのに役立つ。事例研究——歴史的に展開してきたいくつかの運動に、いろいろな角度から検討を加え、それを通して理解や戦略や、実際にどのような経過をたどったかを参加者が学習するものである。

非戦術的訓練——グループ・ダイナミクス(集団力学)、感受性訓練などの実用的なことに直接関係ないかと思われる手段を指している。この種の訓練は、直接行動に無関係か見えながら、いかにグループが機能しているかとか、いかに相互信頼が増大するものかなどの、緊張状態が必要なことを参加者たちが理解するのに役立つ。

補助的推進手段——グループがその目的に到達する過程で補助的に用いられる手段である。最も一般的なものはある一定の期間、もっと情報を集めたり意見を交換し合うためにグループを構成し直すことである。

その他、共同経験、日誌つけ、講義、討議・分析。

訓練の手引き

非暴力行動の訓練が理論と実践の両面において流動的なものだということを読者は、今までの説明でお分り頂けたと思う。組織者のあるものは、訓練それ自体の価値に疑いを抱き、他の者は特定の訓練手段の価値を論議したりしている。訓練は新しい分野で

(三七ページへ続く)

いるのだから、自分たちも彼らから身を引き離し、自らの建設すなわち将来社会のいわば細胞たる要素の建設に努力すべきだ、ということになる」

それは、即時、その場で、個人と集団の自発的創造の方式を見出し、実践していくことであり、同時にそれは人間解放、社会変革の方途の第一歩にほかならない。

対重とは、既存の権力、体制への対抗重力であり、強権社会にかわる、新しい社会的均衡を生みだすための基礎となる要素力である。そこでは言うまでもなく人間の自主・自由が原理とされ、そのための実践が内実となる。

この分離と対重という基本概念の延長線上に構想される方式、実践、そして社会がどういうものであるか、それをより具体的に描き出す課題は残されている。しかしそこに示唆されたものが、現代のわれわれにとって重要な意味をもつことは疑えない。

その方式は権力の奪取とは無縁であり、政治ではなく、経済に視点を置く。政治は、集合力理論によれば虚構となり、集合力を奪取することによってかろうじて成立しているにすぎないのである。

「ブルードンにとって革命は、何よりも社会の基底すなわち生産のレベルにおいておこなわれるべきものであり、それは現在の搾取経済を他の形態の経済に変え、しかもそれが労働者自身、自ら管理し、責任を負い、生産に要する知識をそなえた真の生産主体となった労働者によってこそなされる」

ここに経済組織における自主管理、連合主義、相互主義が提起されてくるのである。こうして、自主管理を原則とする多元的分

(十六ページより続く)

あってその実験はいまだに続けられているのである。

手引きは、訓練を根拠にして作られたものである。しかしこの手引きはまた訓練者や組織者たちが既に直面しなければならなかったいくつかの傾向とか問題に対抗するために、ある種の先入観をも表わしていると思う。即ち、訓練を考える際に対抗すべき傾向とか、問題点には次のようなものがある。訓練が、

- a、実践回避の口実としての理論への逃避となる。
- b、密教的な知識を作りあげたり、エリートを集りを構成したりする。

c、他の主要な問題からそれるために訓練する。

次の手引きは、プレストン・パトリックの地で行なわれた討論の中から生まれたもので、それらは公認された方策というわけではないが、重要事項に関しては広範な合意を得ている。

1. 非暴力直接行動の訓練は人々を実際の状況に対応できるように備えねばならない。
2. 訓練は緊迫した状況の中でなされた時、効果をあげる。
3. 訓練は実用向きな技術を速やかに習得しうるように組まねばならない。
4. 訓練は参加者自身が反応し、評価するように組まねばならない。
5. 訓練は実際に運動を組織することに従属するものである。
6. 訓練の一つの目標は参加者が、更に自分が他の人を訓練するような能力を増進することである。

(終)